

Title	ゴンクール兄弟『ルネ・モープラン』(第七~十章)(翻訳)
Sub Title	Edmond et Jules de Goncourt Renée Mauperin (chapitres VII-X) (traduction)
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2014
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.58 (2014. 3) ,p.155(40)- 174(21)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Mélanges offerts au professeur Hashimoto Junichi = 橋本順一教授退職記念論文集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20140331-0174

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゴンクール兄弟『ルネ・モープラン』（第七～十章）（翻訳）

山本武男

これまでのあらすじ

第二帝政初期のフランス、パリ近郊のブルジョワ家庭を舞台に繰り広げられる微妙に歪んだ「家族の肖像」。核家族内での濃密な親子関係から醸し出される軋轢。結婚適齢期を迎えながらも頑なに周りから勧められるお見合いの相手を拒み続けるモープラン家の末娘ルネ。そのルネを溺愛する父親は、母親とは違い心配する素振りを見せない。一方、長男アンリに母性愛の限りを尽くしてきた母親は、その息子の結婚相手を探すべく、社交界の花形で、上流階級の相談役も果たしているパリのボンプロワ神父のもとへと赴いた。神父はアンリのことを稀に見る立派な青年と褒めるが……続く章では、母親が不意にパリのアンリの住居を尋ねるところから幕が開く。

〔翻訳〕

七

十五分後、モープラン夫人が呼び鈴を一押しすると、赤い上着を着た召使がテブ街の建物の中二階にある戸を開けた。

「こんにちは、ジョルジュ……息子、居るかしら」

「はい、奥さま、ご在宅でいらつしゃいます」

モープラン夫人は息子の召使に微笑み掛けた。中へ入ると、彼女はご機嫌な表情で部屋の佇まい、家具調度に目を遣りつつ通り過ぎた。そして書斎に到着した。アンリは葉巻を燻らしながら書き物をしていた。彼は「おっ」と言うが早いか、葉巻を口から外すと、母が覆い被さる様にして抱擁の挨拶をして来るのを受ける為、頭を椅子の背凭れの方へ仰け反らせ、それからまた葉巻を銜え直して言った。「でも、ママ、どうして此処に？……今日、パリにいるの？一言もなかったじゃない……何しに来たの？」

「あら、お買い物とか、見物とかの為よ……だって、私は何時も田舎に籠りつ放しでしょ……貴方は本当にいわね、パリに居ることが出来て！」

「いやあ！ 全くその通りです、で時にママはこの部屋の新しい内装を見るのは初めてだったよね」

「あ、そうね、全く驚いたわ！ 貴方って、良いセンスしているのね！……本当に貴方にしか出来ないことだわ……ね、此処、もちろん湿度の調節には気を遣っているわよね？」そう言うとモープラン夫人は掌を壁に当て

た。「貴方が外出するたび換気に注意するよう、ジョルジュによく言っておきなさいね」

「はいはい、お母さま」とアンリは子供をあしらう様な面倒臭そうな調子で答えた。

「あらまあ、どうして貴方、こんなもの、持っているの？ 持っていて貰いたくないわ……」モーブラン夫人は本箱の上に決闘用の剣を二つ見出したのである。「これを見ているだけで……恐ろしいことを想像してしまうの……」

モーブラン夫人は一瞬目を閉じて坐ると、「貴方の様な若者の血気盛んな生活が母親をどれほど慄かせるか、分るかしら！……もし貴方が結婚でもして呉れたなら、わたし、こんなには苦しまないと思うのだけれど……わたし、貴方が結婚した姿が見たいのよ、アンリ！」

「僕だって、結婚したいですよ、本当に」

「本当に本当？ ねえ、母親って云うのはねえ、分るでしょ……わたし、怖いよ……貴方は美青年で上品で、機知に富んでいて、女の人に好かれる何もかもを持っていることが分るから……貴方は愛されるべく非常に良く作られているのですもの……だから怖いよ……」

「何が怖いのですか」

「だって、一つしかないでしょ……しない理由って……」

「しないって、結婚のことですか？ 何かしがらみがあるとお考えなのですね？」

モーブラン夫人は頷いた。

するとアンリは噴き出した。「全く！ 僕のママンたら、妻を娶るなら、冷静にお聞きくださいね、磨きのかかった女性に限るんです！ 体面を重んじる青年には、それ以外の妻は似合わない……」

「それなら、言っちゃうだいい、エルボー嬢とのことについて……全く、貴方がすべてをぶち壊しにした訳だ

から……」

「エルボー嬢の件ですか？ お父さまと一緒にオペラ座に行つて紹介された人ですか？ あ、違った……そう
だ、そうだ、エルボー嬢……マルキザ夫人の家での夕食会で御一緒した人かな？ あの人たちが待つている所へ、
ママンは一言の注意も与えずに僕を送り出したのでしたっけね！ ママンは本当に無邪気な人だなあつて思いま
すよ……アンリ・モーブラン殿がいらっしゃいました！ なんて召使が私の来訪を告げる。「此処に、将来の
夫君が居ります！」と言わんばかりのよく響く声でね。大きな枝付きの燭台には灯が点つている。それまでに二
度ほどお会いしたことのある館の女主人は僕に絶えず微笑み掛けて来るし、その息子は、そのとき初めてだつ
ただのだけでも、僕の両の手を握り締める。客間には、僕を見ている様子も無く、母一人、娘一人。結構なお出
迎えだ！ 勿論、晚餐の食卓では、僕はその若い娘さんの隣に坐らせられるのですが、田舎者の家族、財産は農
場、素朴な趣味……僕はスープを啜りながら、それらすべてのことを理解する。テーブルを挟んで向こう側に
いる母親は僕たち二人をじっと見据えているのだけでも、手に負えない感じの母親で、またその身づくろいの仕
方が凄いんだ！……僕は、娘さんに向つて、オペラ座で『大預言者』はご覧になりましたか、と訊ねる。彼女
は「はい、素晴らしいお芝居でしたわ」と答える。「特に第三幕のあの演出がありましたからね」「ああ、そうで
すね、あの演出は……あの演出は……」僕同様、彼女も見えてはいなかったのですよ。第一に、彼女は嘘吐きであ
ると分かつた訳です。僕は面白がつて同じ話題で彼女をもう一押ししてやろうとすると、彼女は怒つた様な顔に
なる。それから皆は客間に移る。「何てまあ美しいドレスなのでしょう！ ご覧になられて？」館の女主人は私
にそう訊ねた。「五年来、あの娘のこと、わたくし、あのドレスの着こなして注目しているのよ、貴方にそんな
話、信じられて？ エムリーヌはお洒落好きなのよ！ 彼女なりの秩序が見て取れるでしょ！」そう言つて、客
齋家たちの仲間に僕を引き摺り込もうとするんですよ……」

「そんな風に思う？ でも参考になるじゃない……」

「五年間もドレスを着古す女なんて！ どんな性質の女か、分り切っているじゃありませんか、それ以上問う必要もないでしょう！ 羊毛の靴下の使い方一つでその人の持参金の額が分かるうつものじゃないですか！ 大地という唯一の財産、ほんの僅かな資産、修理工事、諸の税金、小作料を払わない小作人らとの訴訟、結婚相手を売ることの出来ない財産と捉える娘の父親等々が見えて来る、そんなの御免だ、冗談じゃない、僕だってそれほど若くはないですよ……だから結婚はしたい、しかし良い結婚がしたいのです……僕の好きな様にさせて欲しい、今にどうなるか分かるから。まあ落ちて着いて、僕は「あの娘は本当に綺麗な髪をしているでしょう、それに母親思いの良い子でして」なんて言葉でその気になる様な男じゃない……分かるかな、ママン、そうは見えていないかもしれないけれど、僕は結婚に就いては良く考えているですよ……この世で最も得がたいもの、最も高い代償を要するもの、奪うことで勝ち取られるもの、才能、運、卑しき、禁欲、懸命な努力、根気、決断、活力、大胆さ、労苦、それらが一つでも欠けたら手に入らないもの、それってお金ですよ。金持ちになるのは、幸福なこと、名譽なことであり、それはまた、巨万の富を楽しみ、尊重することに他ならない。そこで僕は悟ったのだが、そこへ、即ち富へ、真っ直ぐに、しかも僅かな時間で、疲れず、難なく、天才がなくとも、簡単に、自然に、手間取らず、また誇り高く到達する手段があるのです、その方法、それが結婚なんですよ……さらに分かったことがある、結婚することで富を得るには、飛び抜けて容姿端麗であるとか、驚くほど才氣煥発である必要などないので、単純にそう云う結婚を望み、冷静にそして全力で望み、この種の婚姻にトランプの札でそうする用にすべての運を賭けてみる、要するに結婚という道に邁進することが必要なのです……結婚を一つのゲームと考えて臨めば、普通の結婚よりも特別な結婚の方が難しいという様なことはない、二十万フランの持参金の相手と百二十万フランの持参金の相手との間に難易の別など無く、すべては冷静さと運に掛かっているのであつ

て、賭金は同じなのだ。テノール歌手が八十万リーブルの年金の女と結婚するご時勢に、計算なんてあったものじゃないですよ。以上が、僕がママンに言い度かったことだけれど、理解して貰えたと確信しています」

驚きと、礼賛と、殆ど敬意に近い感情で呆然となった母の手を取りながら、アンリ・モープランは付言した。

「心配しないで……良い結婚をしてみせます……そして恐らく、ママンが思っている以上の、もつと良い結婚を……」

やがて母は出て行き、アンリはペンを再び取り上げ、『経済評論』の為に起稿した記事の続きに取り掛かって、

「……人類の軌道はある種の螺旋を描くので、円を描くのではない……」と書いた。

八

アンリ・モープランは、現代の多くの若者に似て、自分の本当の年齢と関係なく、今の時代に流行の空気を身に呈していた。青春期の冷淡さ、十九世紀後半の一大特徴であるこの性質が彼の内面全体を支配していて、真面目そうに見えるのだが、冷やかな人だという印象は拭えなかった。彼の人格の中には、本来のフランス人気質とは矛盾する、我々の歴史上、情熱の無い宗派や若々しさの無い党派、嘗てはジャンセニスム、今日に於いては純理主義を形成した要素が認められた。アンリ・モープランは若き純理派であった。

彼は何事にも驚かず、何事も楽しまない、どんな見世物に連れて行かれても気のない風で、感動したらしい表情一つ見せずそこから帰る、そんな子供たちを輩出した世代に属していた。極めて若い時分から、彼は既にいわゆる賢明さと思慮深さとを身に着けていた。中等学校に通っていた頃でも、彼にあっては、教室で、両の掌の中に頭を埋め、辞書の上に両肘を突き、眼前に将来を思い浮かべつつ空想に耽る、と云った事態は起らなかった。

四方を囲い、ボールは弾ね返すが、思いはそこを抜け行く、そんな扉に格子窓のある中庭で、未知なるものへの誘惑や、初めて思い描く人生観といった、十六歳の想像力を動揺と甘味さで満たすあれらの想念も、彼にはまったく無縁であった。クラスには、二十三の有名な政治家の息子たちがいたが、アンリは彼らと親交を結んだ。修辞学を学びつつ、彼は自分が受け入れられそうなサークルに就いて考えた。

中等学校を卒業し、アンリは賢明さを保ちつつ、自分が二十歳であることを隠して行動した。彼の若き日の生活は実に静かなものであった。遊んだり、飲んだり、喧嘩に巻き込まれたりする場所で、彼を見掛けることはなかったが、注目度の高いサロンでは、彼が、既に成熟した女性たちの傍で注意深く、また恭しく振舞う姿が見出された。別の場所では役に立たなかったことが、此処では彼に有利に働いた。彼の冷淡さは、或る種の魅力として認められ、彼の生真面目な印象が却って女たちを誘惑した。男の気品の漂わせ方に関しては、彼は流行の方法そのものを身に付けていた。大学に於ける研究の成果が大いに上ったルイ・フィリップの治世下に於いて、パリの政治、文学の有名なサロンでは、大学教授が、大臣に転身してもなお、社交界に現れるときには着てくるその式服が放つ何とも言えない空気を、各々の社交人士にも要求するようになっていた。大ブルジョワの夫人たちの間では、明朗快活かつ粗忽な気質の男を愛する趣味が、大学での講義を思わせる口吻、身内から湧き出ずる学識、博士が持つ或る種の愛想の良さと云ったものへの志向に取って代わられた。術学的な人物は、その人が仮に年寄りであっても敬遠されず、もし若ければ、屹度相手を喜ばせたので、アンリ・モーブランは面白いと云う噂が流れたのであった。

それは所謂実践の精神とでも云うべきものであった。彼は有用性、数学的眞実、制度としての宗教、正確な知識などの信仰を公言した。彼は芸術に共感し、ブル細工の家具調度が今日ほど見事な出来栄を示している時代は無いという説を支持していた。政治経済という、すべての現象に関わるこの学問は、社交界に入るや、彼に

は天職とも、道とも思われて来て、彼は決然として経済学者となった。彼はこの無味乾燥な学問に、然して広からぬ、が忍耐強く、熱心な知性を適用し、隔週で様々の有名な雑誌に数値で満たされた、纏まった量の記事を發表し、屢々女がそれを手渡せば、男はそれを読んだと答える位にまで知られる様になっていた。

政治経済学は貧しい階級に利益を齎し、その階級に属する人々の幸福を希求し、彼らの貧困を代數の計算に置き換えるので、この学問はアンリ・モーブランに自由主義の色彩を与えた。彼は断固たる野党の立場を取っていたのではなく、彼の意見は、先見の明に満ち、政府の向うべき方向を準備し、起こりうる事態を前もって予測していると言ふ大いなる確信の中で、ただ政府の方針よりも進んでいた丈であった。彼が権力を攻撃すると言つても、それは友人たちを介して意味やヒントを社交界の人々に伝えさせていた毒舌や分かり難い当て擦りを書くという程度のことであつた。結局、彼は現体制に敵意を抱いていると言ふよりは寧ろ、媚びていると言つた方が近かつた。サロンの人間関係や、社交界での出会いが彼を政府の影響の及ぶ範囲内、行政が保護する領域の境界線上に留まらせた。彼は極めて多忙な、自分の著作に関しては署名をする時間しか持たない高級官僚の研究を代筆し、校正刷りを直した。彼が地元の知事と「非常に近い仲」であつたのは、その関係を通して地方議員になり、そこから更に国会議員に選出され度いと云う肚があつたからだつた。この政府を批判しつつ政府に擦り寄ると云うこの二つの態度を使い分けること、彼をあらゆる方向に結び付け、何者とも問題を惹起しないこの妥協と調整の態度に於いて、彼は優れた腕前を發揮した。彼は、自由主義者、経済学者である所為で、カトリック教徒たちから被る、自身の人格や学説に対する不信や敵意を和らげる手段を見付けていた。彼らの間にあつては、寛容や同情を以て振る舞い、聖職者に対しては好感を持たれることに成功し、また物質的な進歩を精神的なそれに、経済への信奉をカトリックの信仰に、ケネーを聖アウグステイヌスに、バステアを福音書に、統計を神に関連付けて論じることで教会に媚びるのに成功した。更に、これらの巧妙な行動とは別に、その宗教と政治経済学を結

び付けている役割や、奥深い宗教性、秘められた信仰心に起因する規則的な宗教上の実践などを通して、彼はブランボワ神父の寵愛を得ることとなり、また何時の間にか敬虔な信者の集まりも味方にし得ていたのだった。

アンリ・モーブランは、テブ街の建物の中の彼の住居を若者たちの夜会の為にと提供したが、事務机に似た食卓を囲んだその真面目な夜会では、招待客たちは自然法、陪審制度、生産力、人類の増殖等々に関して討論した。アンリはこれらの夜会を或る種の講演会の様な物に発展させたいと考えた。彼は、結婚したら直ぐにも開きたい大きなサロンの為に、そこで男たちを選別し、構成員を探す一方、経済学界の権威や著名人の注意を促し、またそこへ主催者としてフランス学士院の会員を招き、彼らを歓待し、自らの宣伝にも努めることで将来、人文・社会科学アカデミーで彼らの隣の席に座せて貰おうと企みしたのであった。

が、彼が遺憾なくその才能を、その器用さを発揮したのは、組織の利用に於いてであつた。彼は、人間を一人から開放し、更にある人々の纏まりが大勢の者たちと結び付くことで、個人がゼロからでも出世して行くこの偉大な方法に最初から固執した。彼はありとあらゆる分野の集會に顔を出した。彼はダゲッソーの講演會に参加したり、また来るべき國會での論戰に備え、己の弁舌の力を生かそうと努め、演壇での立ち居振る舞いに就いての教育を受け、雄弁術を訓練し、政治家になるべく研修を受けている、多くのあの手の若者たちの間に滑り込んだりした。クラブや集會、更には中等学校の同窓會、弁護士の講演會、歴史、地理、救済、科学、慈善事業に関する学会等は、彼は如何なるものも蔑ろにはしなかつた。それ丈ではなく、個人に輝きを与え、その個人を集團の集會的影響力に浴さしむるあらゆる機関に彼は姿を現し、数人分の働きをしてみせ、知り合いを増やし、關係を結び、友情を深め、彼に某かの形で有利に働く共感を獲得し、彼の野心の第一歩を記して、團體の事務局から團體の事務局へと渡り歩きながら、重要性を認められ、未だ知られざる將來の著名人として、政界でそのうちに輝き出す名前の一つになろうと働き掛けていたのだった。

おまけにこの役割を演じるに際しては、彼はお詠え向きな存在だった。言葉数が多くて行動的である彼は、我々の世紀に於いては成功に直結する噂、彼は輝ける凡人である、と云う噂を広く流すことに成功していた。社交界に於ける彼は、稀に自分の記事を朗読した。が、大抵は、自然な感じで、ドラローシユの筆になる肖像画の中のギゾー氏の様に片手をチョッキの中に入れていた。

九

「あら！」とルネが、駆け回ってきた子供がする様に酷く息を切らして食堂に入って来るや、「あたし、みんなもう降りて来ていると思っただわ……で、ママは何処？」

「パリに行っているんだよ……買い物のために」とモープラン氏が答えた。

「あ、そうなの。じゃあ、ドノワゼルは？」

「その坂まで人に会いに行つたよ……昼食に引き止めておこうと思つたのだがね。では、我々は昼御飯としよう」

「ご機嫌は如何、パパ！」そう言う到着席せずに、ルネは父親の方へ向うや両の手を首の周りに差し出して彼を抱きしめ始めた。

「ここら！ いい加減にしなさい、馬鹿だなあ」モープラン氏はそう言って、微笑みながらもがき始めた。

「ピンセットみたいに抱き締めさせて、ほら、こんな風に……」

そう言うと彼女は父親の両の頬を掴んだ。

「相変わらず子供だなあ！」

「あたしを見て……パパがあたしを少しでも愛してくれているかどうか、確かめたいの……」

そして一度接吻したあと顔を起したルネは、父親から身を離れたものの、彼の頭は両の手の先に抱えた儘であった。二人はその状態で優しく、丁寧な目と目を見詰め合った。食堂の硝子戸は開かれていて、部屋の中に外光と庭の香りと物音が入って来た。テーブルの上に差す一条の光が、磁器の上に軽く触れ、コップに当って輝いていた。微かな風が明るい陽気の中に吹いていて、柔らかい葉陰が床板の上で揺れていた。木々の中で鳥が羽ばたきするのがぼんやりと聞こえ、遠くでは、花々に寄り添う鳥たちが囁っていた。

「私たち二人だけね……なんて素敵なのでしょう！」ルネはそう言うとナプキンを畳んだ。「あら！ テーブルが大きすぎるじゃない！ パパと離れ過ぎてしまうわ」

食器を手にして、彼女は父親のすぐ隣にまで来て坐った。

「だって今日はあたし一人の為にパパが居てくれるんだもの、あたしのパパとの時間を楽しみたいのよ」ルネは自分の椅子を父親のそれに近付けた。

「ああ、そうそう！ 思い出すなあ、昔ルネが何時もお飯事をパパのポケットの中に手を入れてしていたのを……そうだ、あの時、ルネはもう八歳だったんだよ」

ルネは笑い出した。

一瞬の沈黙の後、ナイフとフォークを皿の上で休ませると、「パパなあ、昨日は、怒られてしまったんだよ……」とモーブラン氏はまた口を開いた。

「あら！」と一言ルネは言うくと天井の方に無邪気な目を向け、それから父親の方に雌猫のような媚を含んだ視線を向けて、「本当に可哀想なパパ！ でも何故？ パパが何をしたって言うの？」

「本当に分らないのか、冗談だろう……その事に就いては、ルネの方がパパよりも良く分かっている筈だ。こ

ら！ 不屈き者……」

「えー！ 怒るの、パパ、それならあたし、立ち上がって……それで、抱き締めてしまうわ！」 そう言いつつ彼女は中腰になった。

「まあ、お坐りなさい、ルネ、どうか」とモープラン氏は厳格であろうと努める調子で言った。「可愛いわが子よ、分っていると思うが、貴女の昨日の事だけでもね……」

「え！ パパ、こんな天気の良い日に、あたしを貴女呼ばわりするの？」

「でもだな」モープラン氏は娘の、愛撫と挑戦が混じり合った様な一寸反抗的な表情の前で威厳を保とうとしながら言った。「説明して貰えるかなあ……だって明らかにわざとしたことだろう……」

ルネは悪賢い感じで両の目を瞬かせつつ、二三回頷いた。

「真面目にしゃべっている積りなんだが、ルネ」

「何言っているの、私はとても真面目よ、本当に……だって昨日の事はわざとやたって認めている訳だから……」

「それなら、何故やったの？ 説明して貰えないだろうか」

「何故って？ そうしたかったからよ、でもパパにあまり迷惑が掛からない程度に……あれは、だって、だって……」

「だって？」

「だって、あたし、パパのことが、昨日のあの男の人よりもずっとずっと好きなの……それこそ、もう、ずっとずっとよ、本当に！」

「聞きなさい、何時までも結婚相手を探し続ける訳にもいかないのだよ……あの男が気に入らないとなると

……強制する積りはなかったけれども……でもルネが話をややこしくしてしまっただよ。お母さんと僕はね、寧ろ反対に、あの男が配偶者になれば……」

「御免なさい、パパ……もしあたしが初めて一度会った時に、ルヴェルシオンさんをはっきりと拒絶していたら、パパはあたしのことを粗忽者の、馬鹿の、おっちょこちよいだと言ったに決っているもの……ママンが昨日、何を言っていたか、よく分っているのよ……。こうするより他、仕方がなかったんじゃないの？ ルヴェルシオンさんに会って、それからもう一度会って、彼を好きになる様に時間を稼いだのだけれど、恐らく相当強い反感が自分の中に有るのがよく分かってしまって、本当にそれは……」

「だけど、それなら何でそのことをお父さんとお母さんに打ち明けて呉れなかったの？ 幾らでも、こちらから関係を打ち切ることには出来たのに……」

「恩知らずなんだから、パパは。その面倒をパパから取り除いてあげたんじゃない。あの青年が身を引けば、何もすることがなくなる訳でしょ……すべてはあたしから起った事だし……ね、この通り、あたしがどれほど献身的であるか分かったでしょ！ 他の機会にだってそうだったわ……」

「聞きなさい、良い子だから。私がこう云う話し方をするのは、お前の結婚に関することだからなのだよ……おまえ自身の結婚にだ！ 私は長い間、決意を抱いてきた、お前と離れると云う決意をだ。父親というのはエゴイストなんだ、分るよな、大概は何時までも娘を手放したくないと望んでいる……想像するだけで苦しくなるのだ、娘の微笑みがなくなつた後に仕合せでいられるか、娘のドレスが目の前を過ぎることがなくなつた家はどうかになってしまうのか！ しかし、そこでしっかりと理性を保たなければいけない。今は私もお前の婚を愛するところが出来そうな心境になって来ている……それと言うのも、私ももう若くはないからだ、私の可愛いルネよ」そう云ってモーブラン氏は両の掌の中に娘の両手を包み込んだ。「お前のパパはもう六十八なんだよ、分かるかい

……後は、お前が仕合せになるのを見るだけなのだ……お前の未来、ああ、分つて呉れたならなあ！ 私が何れだけ考えているか、何れだけ思い悩んでいるかを……ママだってお前のことが好きなのは確かなのだが、あの人の性格とお前の性格との間には一寸距離があるからなあ……それ丈にも私がお前が他界したら……大変だよ！ しておかなくてはならない事が山ほどある、にもかかわらず、私はもうこの年齢だ……分るだろう、お前の夫も子供も見ずに……やがてこの世からいなくなる老いたパパへの愛情に代り得る愛着がお前の心の中に芽生えるのも見ずに死ぬんじゃないかと考えてしまう訳が……」

そこ迄でモーブラン氏が言葉を継げなくなつたのは、娘が啜り泣きで咽喉を詰まらせながら抱き付いてきて、チョッキの上に頭を押し付けて泣き出したからであつた。

「ああ！ そんなこと言うのは意地悪よ、意地悪よ……」と彼女は噎せ返りながら言つた。「どうしてそんなお話をするの？ もう二度としないで！ もう二度と！」そう言うとお前は手で払い除ける仕草をして、暗い想念を追い払つた。

モーブラン氏は娘を膝の上に坐らせていた。彼女を両腕の中に抱き締め、その額に接吻してから、「泣くのもうお止し」と言つた。

彼女はまた繰り返して、「もう二度と言わないですよ……意地悪！」と言つた。その様子は恰も悪夢の覚め際にもがいているかの様であつた。そうして、手の甲で両の目を拭いながら、彼女は父親に向つて「あつちで一人で泣かせてね」と言つて去つて行つた。

「あのダルドゥイエつて奴は、完全な阿呆ですよ」とドノワゼルは家に入つて来るなり言つた。奴との会見は免れ得ない状況だつたのはお分かりだと思ひますけど……おや！ お一人なんですか？」

「そうなんだ……妻はパリに出ているし、ルネは上の階に上ったばかりだ」

「あれ、何てご様子をなさっているのですか、モーブランさん！」

「僕が、かい？……いや。ルネとひと悶着あったもので……ついさっき……あの結婚のことで、例のルヴェルシヨンとの……馬鹿なことをしたよ、あの子に早く孫の顔が見たい……パパ位の年齢になると、何時死んでしまうか分からないからなんてことを言ってしまった……それで……可哀想にあの子はとても感じ易いから、分かるだろう……彼女は今、自分の部屋で泣いている。行ってはいけないよ……あの子には、持ち直す為の時間が必要なんだ……その間、僕は部下の工員たちの仕事ぶりを見てくるよ」

一人残されたドノワゼルは、葉巻に火を点けて、一冊の本を取り上げると、庭に幾つかあるベンチのうちの一つに腰掛けて読書を始めた。それから優に二時間は過ぎた頃、彼はルネがやって来るのを見た。彼女は帽子を被っていたが、その生気に満ちた顔は、喜悦と言おうか、清澄で穏やかな或る種の興奮の様なもので輝いていた。

「おや！ 外出していたの？ で、何処へ行っていたのかな？」

「何処へ行っていたかですって？」ルネは帽子のリボンを解きながら言った。「じゃあ、あなたには教えてあげる、だってあなたは、あなたは私の友達だもの……」そうして彼女は、帽子を脱ぎ、女性たちが髪の毛を整える為にするあの麗しい動作を以て顔を上げて言った。

「教会に行っていたのよ、ねえ、あたしがあそこで何をしていたか知りたい？ 神さまに、あたしがパパよりも先に死んでしまう様、お願いしていたの……大きなマリア像の前にいたのだけれど……笑わないでいてくださるかしら……笑われたらあたし、とっても辛いわ……多分あれは太陽だったのだろうけれど、でも或いは、あたし、ずっとマリアさまを見詰めていたのかも知れない、分らないわ……一瞬、マリアさまが太陽のように輝いた様に感じたのよ」そう言っただけでルネは自分の言ったことを確認する様に頷いた。「とにかく、あたし、とても仕合

せなの……それにあたし、お膝がとっても痛いよ、堪らないわ……だってずっと跪いてお祈りしていたのだから、椅子も何もなく、石の床の上で……ああ！ あたし、正しいことの為にお祈りしていたのよ……誰にも咎め立てされる謂れないわ」

十

それから二三日の後、モーブラン夫妻とアンリ、ルネそれにドノワゼルは夕食後、家の後ろと製糖所の壁の間の狭い、小さな庭に集合した。庭には大きな木が立っていたが、それは一本の樅であった。幾本かの薔薇の木は、その樅の一番下の枝の辺りまで這い登って絡まり、緑色に見える枝の先で薔薇の花が揺れていた。樅の木の下にはブランコが、後ろには密生したりラヤクマシデの植え込みが見え、前方には円形に芝が植わっていて、ベンチが一つと、白亜の縁石に囲まれた非常に小さな池があって、その噴水はもう出なくなっており、中は水生植物が密生していて、水底の隙間には真つ黒な山椒魚が幾匹か泳いでいた。

「それじゃあ、もう全くお芝居を演じる気はなくなってしまったの？ ルネ」とアンリは妹に訊ねた。「計画はまったく反故にされたと言ふことかな？」

「反故にされたですって、そんなことないわ……でも、どうしろって言うの？ あたしの所為じゃない、条件さえ整えば、あたし、責任を持って演じて見せるわ。だって、協力者が誰も見つからないんだもの……独白の部分がなければ、やってくれる人も出て来るのかもしれないけれど……ドノワゼルはあたしの申し出を拒否したし、お兄さまは大根役者だから」と彼女は自分の兄に向かって言った。「お願いする必要も無いのだけれど……」

「僕は、とても良い役者だよ……」とアンリが言った。

「あなたが良い役者なの？ アンリ」と驚いた表情でモーブラン夫人が訊ねた。

「まあ、男優に関しては事欠かないのよ」とルネがまた喋り出した。お芝居をお願いする男の人だったら、幾らでもいるわ。問題は、女優の方よ……ああ、まったく、婦人達の役が問題なのよ……あたしと共演して呉れる人が見付からないの……」

「心配ないよ！」とアンリが口を挟んだ。「我々の知人全員の中から探せば、上手く見つかるに違いないよ……」

「ほら……デュランさんの娘さん……絶対にぴったりだわ！ デュランさんの娘さんだったら、ね？ あの人のうちのサン・ドニにあるでしょ……てことは、お稽古をするのにも都合よね……彼女は一寸おぼこだけど、シャヴィニー夫人役には向いていると思うわ……」

「そうか！」とドノワゼルが反応した。「君は相変わらず、『気紛れ』を演じ度がついているのだね」

「道徳的でしょ？……だってお兄さまと共演したいのですもの……」

「それなら公演での収益は、貧しい人たちの救済の為に宛てよう、僕はそれを望むが」とドノワゼルが畳み掛けた。

「どうしてそうしたいの？」

「そうすれば慈善病院のホールを使わせて貰えるだろう」

「考えてみましょうよ、そうね、考えてみましょう……じゃあ、エマ・デュランね、ねえ、ママン、どう思う？」

「わたしたちとは交際範囲が違うわ、あそこは、あなた」とモーブラン夫人は気色ばんで答えた。「遠くから眺めているのが丁度良いのよ、あの人たちは……だって、周知の通り、彼らの出身は……サン・トノレ街よ。デュ

ラン夫人はいそいそと客の婦人たちを馬車のドア際まで迎えにいくので……その間にデュラン氏は裏口を通り、召使を連れ出して角の酒場に行つて酒を振る舞うとか……ま、こんなところがデュランさんの家の人たちの境遇よ！」

本質的には優秀な女性であるにもかかわらず、モープラン夫人はしばしば強い軽蔑と嫌悪の表現を用いて、このように誰彼となく知己の財産や出身、また社会的な地位などを貶めることがあつた。それは、意地悪や、中傷悪口を楽しむ気質からではなく、また嫉妬からなどでは更々なかつた。これは単に、ブルジョワの理解し難い傲慢さ、彼女の血統以外に純血は無く、彼女の家族の他に高貴な家柄は無く、彼女の身内以外はただのろくでなしかそれに類した者と看做し、彼女の所有している物の他には確かな物は何も無く、彼女が手にしない物は無価値な物と考へてみせる信念から來ていたので、彼女は人々が尊重されたり、名誉を受けたり、また良い所得を得たりするのをさえ否定した。

「我々の知るすべての人たちに就いて、私の妻はこんな風に物語るのだからねえ！」とモープラン氏が言つた。
「ねえ、パパ、ルモリちゃんにお願いしたらいいんじゃない、小さくて可愛らしいと思ふけど、どうかしら」

「お母さまに訊いてご覧よ。言つておやりよ、君」

「ルモリのお嬢さんのこと？ それはあなたの方が良くご存知なんじゃないの？」

「何にも知らないよ」

「何ですつて？ あの子の父親の話、知らないの？ 彼は、イタリアの貧しい化粧漆喰工だったのが……文無しでパリに出てくると、お金を何処から手に入れたのか、モンパルナスにバラックと小さな土地を購入するけれど、その土地の中身は、晒し台があつたモンフォーコンそっくり！ 彼は肥料になる乾燥人糞が出るその土地を売つて八十万フランを稼ぎ出す！ そうして、それから証券取引所で株を弄いくつて……おお厭だ！」

「ああ、その話か」とアンリが言った。「お母さまは、想像力が逞しくていらっしやるから……ところで何故、ブルジョアさんのところのお嬢さんに頼んでみないのかな？……彼らは今、正確に言えばサノワに滞在しているのだけれど」

「ブルジョアさんの所のお嬢さん？」とモーブラン夫人が聞き返した。

「ノエミのことかしら？」とルネが強い語調で再び話し出した。「お願いしたら良いような気がするけれど……でも、この冬に会ったとき、彼女、あたしに対して何だか冷淡な感じだったわ……肚に一物あるみたいなの……分らないけど……」

「彼女は……彼女は三十万リーブルの年金を受け取るようになっていくからな」とドノワゼルが割って入った。「この手の娘は、母親が見張っているものさ……詰り、男の兄弟を持つ女の子とは娘を余り付き合わせたがらない傾向があるのさ……だから娘もその辺のことを注意するよう、言い含められている可能性があるって言うだけのことなのだけれどもね」

「それに、えらくお高くとまっているわよ、あの人たちときたら！ 折り合いが付くとは思えないわ……」
 そこまで言うと、モーブラン夫人はアンリに訊ねた。

「それはそうとして、あの人たちは何時もあなたに対してはとても親切だったんじゃない？ ねえ、アンリ。あの人、何時もあなたには愛想が良いじゃない、ブルジョア夫人は」

「夫人は僕に向っては、何度も彼女の夜会に、お母さまがお見えにならないのを嘆いてすらおられましたよ……お母さまが、夫人の娘に会わせる為にルネをもつと連れて来てくださったれば、とも漏らしてましたね」

「本当？」とルネは大変仕合せそうな表情になって言った。

「あなた」とモーブラン夫人が呼び掛けた。「何か言って下さらない、ねえ、アンリが言ったことについて。プ

ルジョ嬢のことについて……」

「君は、僕がどんな風に反対するのをお望みですか？」

「なら」とモープラン夫人が切り出した。「アンリの案に賛成。土曜日に参りましょう。あなた、それでいい？」

……アンリ、あなたもわたしたちと一緒に来るのよ」

二三時間の後、彼らは皆、就寝した。が、アンリ・モープランだけは、独り立ち尽くし、部屋を縦横に、すでに火が消えてしまっている葉巻を口にしたまま、歩き回っていた。時折、自分の考えに薄笑いを浮かべているような表情で。

(つづく)

当翻訳は以下に拠った。Edmond et Jules de Goncourt, *Renée Mauperin*, éd. Nadine Satiat, Flammarion, coll. GF, 1990, p. 100–115.